

日本語英国教会ニュースレター

第85号 2017年3月発行

自立は自分だけで？

高橋宏幸司祭

悲しいことですが、マスコミを通じて、思わず目を覆いたくなるような事件、血なまぐさい事件、心痛めずにはいられない事件が後を絶ちません。被害者や、その関係者の心の痛みや悲しみには、想像を遥かに超えるものがあることと思いつつ、私たちも心を痛めずにはいられないはずです。

一方で、事件を起こした人たちの言葉から、その背景には「孤独」「孤立」「一人ぼっち」といったものが感じられます。周りから見過ぎにされたり、忘れ去られたり、自らも人と関わろうとしなかったり、人を避け続けてきたり、いずれもが悲しいことばかりです。「人間関係で苦しむ」以前に、「人間関係とは何か、そのものが分からない、経験がない」とか、「人間関係の取り方そのものが分からない」という感じすらします。また、「人を信じきれない、信じたことがない、信じるのが怖い」、そして自分自身をもといった感じもします。

そのような経験、体験を経ずして、とりわけ日本では戦後の民主主義の中、「自立することが大切である」と声高に言われてきました。決して、誤ったことであるとは思えません。無意味なことであるとも思えません。確かに、自立することは大事なことですし、私自身、家で、学校で、教会で、数え切れない程言われてきました。それは、聖書の教えやキリスト教信仰や霊性に於いても、大事なテーマの一つであると言えます。

確かに大事なテーマの一つではありますが、一足飛びのようにして、聖書やキリスト教は「自立」ということを言うてはいないようです。あるいは、頭ごなしに「自立しろ、自立しろ」とか、「自立しなければダメだ、ダメだ」とも言うてはいません。

では、どう言うているのかとなりますと、一辺倒に「自立、自立」と言うているのではなしに、あるものとのバランスの中で言っ

ています。そのあるものとは、「一緒に」ということです。もしも仮に、100パーセント自立でき、誰からの助けも、支えも、声も要らないとするなら、家庭も、友達も、共同体も、社会も必要ないどころか、かえって足手まといにすらなりかねません。しかし、そうはいきません。「人という字は、二本の棒が支え合って初めて出来上がる」と言った人がいました。「人と人との間を美しく見よう」と言った方もいらっしゃいました。

一緒に何かを感じ合い、一緒に何かを分け合い、また、ある時には相手に寄り掛かったり、寄り掛かせてあげたり、そのような姿や生き方は、かえって豊かなものともなり得ましょう。そしてその中で、自らの足で、心でしっかりと立つという意味での「自立」というものをキリスト教は大事にし続けています。そのことは、イエス様の弟子たち、イエス様に心を砕いて頂き、新たな歩みを頂いた人たち、そして後に「大使徒」とまで言われたパウロたちの生涯の中に見て取ることができます。これらいずれの人たちも、初めから自立あるのみではありませんでした。「一緒に」という招きの中で、励ましを通して、少しずつ、しかししっかりと自らが立ち、自らが立たされる道を進み続けて行きました。

ともすれば、今の社会、「自立、自立、何が何でも自立、自立あるのみ」といった風潮が、かえって「孤立」や「孤独」を生み出す大きな原因、要因になっているような気がします。単なる手抜きや怠けは別ですが、時に誰かに寄り掛かせてもらった時の安らぎと感謝、寄り掛かせてあげる頑張り、そして「一緒に自立へ!」、大事にしたいものです。

-- 高橋司祭は東京にある香蘭女学校のチャプレンです。香蘭女学校の創立には、英国教会の宣教団体の働きによるものです。高橋司祭のお働きを覚えてお祈りください。

□□□□□□ 前回の報告 □□□□□□

日本語英国教会 St.Martin's

2月の集まりは、新しく戸川さんをお迎えして、大人14人子供8人が集まりました。戸川さんは、聖公会の日本人最初の主教で

あった元田作之進主教のひ孫さんにあたる方で、現在ご主人の転勤でロンドンにお住まいです。

先月園田先生のお話にあった「数えてみよ主の恵み」の聖歌の練習をしてから、近況報告、聖書に関する質問。「昔は教会堂でらい病の診断までしていたと聖書にはあるけれど、幅広い活動を教会はしていたのですね」というコメントに、園田先生から、当時は教会が生活の中心になっていたから、宗教だけでなく行政、医療、教育など全てが教会で行われていたとの事。ところで、「らい病」(ハンセン病:皮膚病の一種)という言葉でさえ、現在では差別用語とみなされ(昔から汚れた者として長期隔離され、「らい」には馬鹿という意味もあったそうです)、公に使ってはいけない言葉になっているようです。

遠藤淑子

「敵を愛せよ」

今年の2月19日は、教会の暦で顕現後第7主日、英国教会の暦では、レント(日本語では大斎)前の第2主日と異なっています。レントという季節はイースター(復活)に向かう前の大切な季節です。

今日の朗読箇所「敵を愛し、自分を迫害するものの為に祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。」は、マタイによる福音書5章から7章にある「山上の垂訓、あるいは説教あるいは教え」と呼ばれている中にあります。イエスが人々に説教された言葉が述べられ、大変重要な箇所です。

敵については、個人的な経験と共に、ビルマの捕虜と日本人の和解活動を長年しているホームズ恵子さんの言葉「憎しみからは憎しみしか生まれません。過去の過ちを謝罪し、赦し合い、和解をして初めて、心の平安を得ることができるのです」を紹介しました。

親しい人々を愛し、敵は憎むのがごく当たり前のところに、イエス様はこれを全く裏返すかのように「迫害するものの為に祈りなさい」と言います。神様に従う子であれば、敵をも愛しなさいと言われても、できないとなあと言う前に、捕らわれ、ムチで打たれ、十字架にかかられたイエス様は自らの身をもって実行されたことを心にとめましょう。そこに神様の限りない愛が示されています。神様の愛には、枠がなく、終わりがありません。

当日の特祷（特別な祈り）には「愛がなければどのような行いも益がなく（無に等しい）、愛は平和とすべての徳のきずなであり、愛のない人は主の前では死人に等しい、と教えてくださいました。どうか聖霊を送り、この最もすぐれた賜物をわたしたちの心に注いでください。」とあります。愛することが最も大切だと分かっているけれど、私たちは弱いものなので、愛することがなかなかできない。だからこそ、聖霊という神様からの力をいただいて、愛することができるようにしてくださいと祈るのです。このレントの季節にこれらの言葉を心にとめて、イエス様からの教えが実行できるよう祈りましょう。

ジョンソン友紀

追記ですが、後日「集会、とても有意義でした。日々の生活に追われて忘れがちな大切なことを再認識できたと思います。」ととてもありがたいメッセージをいただいています。

□□□□□□□□□□□□

日本語英国教会 South East からの報告

昨年 10 月に開設した聖書を読む会の第 3 回目が、金曜日の午後 St High' s 教会にて行われました。前回 12 月のクリスマスに因んだ 2 章（イエスの誕生）に引き続き、今回は 4 つの福音書のうち、唯一ルカによる福音書の中で取り上げられている少年時代のイエスを中心に皆で通読を行いました。参加者の方から寄せられた預言者についてのご質問や、モーゼの時代の過越祭のあり方などの解説と交えながら、イエスの一行が神殿において信仰の厚いシメオンや女預言者のアンナによってどのように迎えられたのか、イエスのいとこである洗礼者ヨハネの役割についても確認を致しました。

また、イエスの系図にも触れました。マタイによる福音書にも登場するイエスの系図は、ルカによる福音書においては少し違った形で記録されています。アブラハムからダビデを経由してソロモンをはじめイエスの法律上の父であるヨセフの家系を辿る系図と、イエスの母であるマリアから遡るイエスの血肉の親族を辿りナタンからダビデに繋がると言われる系図です。福音書の書き手によって、当時の家族における文化や習慣がそれぞれに反映されているようですが、いずれの系図においても、イエスが神から約束されたアブラハムの子孫であることには変わりがないことが分かります。

今回はルカによる福音書の第4章（誘惑を受ける）から始めます。洗礼を受けたイエスが悪魔に誘惑を受けた40日間の場面はイースターにも関連していますので、その背景を織り交ぜながら聖書を読み進めたいと思います。

Hall 美奈子 jac.selondon@gmail.com

□□□□□□□□□□□□

2月15日 Bray Day 聖餐式とUSPG訪問

1701年にトーマス ブレイ司祭によって創立された英国の伝統ある宣教団体USPG (United Society Partners in the Gospel) の316年を覚えるBray Day 聖餐式に、日本語英国教会として9名参加しました。

礼拝後 USPGのオフィスに移動し、最高責任者であるJanette O'Neilさん、そしてRachel Parryさん他スタッフから、活動について説明を伺いました。USPGは『イエスはすべてのコミュニティに来た』という理解に基づいて、貧困、健康、正義それぞれの課題に関わりながら、地域の教会の働きに関与しながら支えて、時には難民問題のようなクライシスにも応じています。以前あった『西洋中心の宣教活動』とは異なった視点が示されました。

会議室と事務室に展示されているステンドグラスは以前のオフィスから移され、倉庫に保管されていましたが、昨年取り付けられたものです。4人の主教さんのステンドグラスでいづれも現地の教会で初めて主教になった方々が描かれています。そのうちの一人が1922年に日本聖公会の日本人初の主教になられた元田作之進主教です。元田主教は立教大学学長でもありました。そのひ孫にあたる戸川さんと共に拝見でき、とても感動的な出来事となりました。

参加者から次の感想を受け取っています。『寒い中を久松さんが、自ら案内役として教会の前に立たれたこと、感謝でした。礼拝も素晴らしかった上、参加者皆さん とっても和気藹々でした。お若い方の経験（USPGによる海外体験を踏まえて環境問題に取り組んでいる方）からくるお話も分かりやすく、皆様のご苦勞に感謝です。何だか感謝の言葉いっぱいの日でした。』『最近礼拝以外積極的に教会の集まりに行く事はありませんが、今回誘って頂き久しぶりに皆さんの活動を伺い、実際変わっていく世界の中での

教会の役割や対応やクリスチャンとしての自覚などについて考えさせられました。

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □

We Won't Forget You-東日本大震災 6周年を覚えて

昨年に引き続き、3月11日（土）St. Margaret's Westminster Abbey のチャペルの中央に桜の木とティーキャンドルの燭台と写真の展示に加えて、写真集などの資料も展示しました。今回もより多くの方々に大震災を知らせ、僅かな時間でも祈ってほしいと願って企画しました。一時間ごとに被災者への想いを込めて祈りが唱えられました。

領事館から書記官そして福島県人会会長や会員を含めて多くの方々が来訪しました。特に当日は隣接の Abbey が非公開でしたので、諸外国からの観光客を含めて数多くの訪問者がありました。事前に用意した桜の花びら 290 枚が不足、何回も取り外しながら、次の来訪者たちに手渡すほどでした。

訪れた方々の中には、私達のメンバーである IK さんから勧められた観光ガイドが日本人グループを、あるいは鹿児島県の高校の先生が生徒たちをそれぞれ引率してきました。九州地震でご両親が被災され、幼い子供と共に来られたお母さん、震災後すぐに現地ボランティア活動をされた方、被災地で医療従事をした友人がいる方など、それぞれの想いが持ちながら追悼に来られた方々、感情を抑えきれず涙ぐむ人々などとの出会いがありました。ウェストミンスターアビィのスタッフのご協力と多数のボランティアの支えによって、このような祈りの場を提供できたことは、感謝です。

参加されたボランティアの方々から以下のような感想の言葉をいただいています。

「ウェストミンスターアビィのような立派な教会の場を借りて追悼の祈りを捧げることができ、大きなご慈悲を感じます。私個人にとっても震災の祈りと共に色々な不安がある日々、昨日は大きな安らぎが与えられました。この大きな慈悲をありがたく受け入れさせていただくと共に日々感謝を忘れずに暮らしていこうと思います。」

「良い体験をする事が出来良かったです。」 「何も出来ないけれどセントマーガレットと皆さまのお働きのおかげで ちょっとでもお祈りができて、 本当にこの機会を作っていただいて、感謝の気持

ちでいっぱいです。」「福島県の友人とご一緒にお祈りすることができました。忘れないことがとても大切です。」

「大勢の方々にお会いできてたこともよかったです。」

□□ ちょっとお耳に□□

2月半ばにメールで遠藤周作の信仰と作品についての繋がりがよく説明されていた「遠藤周作と沈黙」についてのプログラムを紹介しましたが、現在閲覧ができなくなっていました。

幾つか心に残った言葉を紹介しますとー遠藤周作が死と直面した病いをした経験を通して、「同伴者のイエス」を見出したとあります。「苦しみを自分だけで背負っていると思っていたが、その苦しみを本当に分かっているのは神。」「神の愛を知るために（苦しい出来事を含めて）今までのことが必要であって、意味があった」

折ありましたら、ぜひ、「沈黙」を読んでください。英語版は貸し出し可能です。ご希望の方はジョンソン友紀まで

□□□□□□□□□□□□

日本聖公会の九州地震支援室の働きは以下のサイトでご覧になれます。もうすぐ一年を迎えますが、未だに地震直後から変わらない状態にあるところもあると聞いています。どうぞ、引き続き覚えて被災者の方々と支援活動をされている方々の為にお祈りください。

<https://www.facebook.com/koritsusasenai/>



□□ 4月の集まり□□

第三日曜日はイースターですので、第四日曜日の4月23日が集会となりますので、ご了承ください。

□□ 日本語英国教会発足 10周年記念礼拝□□

5月21日（日）午後3時

聖餐式：ウィリアムズ郁子司祭

上記の特別礼拝の詳細は、追ってお知らせいたしますが、特別なお祝いの日となりますので、今からご予約に入れてください。



「おいで子どもたち」—初めて陪餐する子どもたちへ
とても綺麗な写真入りで初めて聖餐式でパンとぶどう酒を受ける子供たちへの学び深い言葉と祈りが入っている小さな本です。親子で一緒に読みながら、聖餐にあずかる喜びが共に与えられるように願って作成された本です。一冊5ポンドで先着4名様までお譲りします。

日本語英国教会 West Acton

3月19日（日曜日）

午後3時から 5時まで

日本語聖餐式

司式：トム プラント神父

ティータイム

場所：St. Martin's,

Hale Gardens, LONDON W3 9SG

礼拝後にはティータイムをもちます。

皆様、お誘いあわせの上いらしてください。

Commissioned Lay Minister：ジョンソン友紀

120 Carthorse Lane REDDITCH B97 6SZ

携帯 07503 893880

yukifunakawa@btinternet.com

ブログ <http://blog.goo.ne.jp/jacuk>

<http://www.geocities.jp/eikokukyokai07/>